

人間、あまりにびつたりの名前をもっていると、誰も名前では呼んでくれなくなる
ことがある。大浦がそうだ。とにかく大きい。身長が一八五センチあって、体重が百
キロ。高校時代はずっと柔道をやっていて、もう少しで県の代表選手としてインタ
ーハイにでられるところまでいった。いや、本当はでられていた。でられなかったのは、
予選の前日、街の喧嘩で相手のアバラを折ってしまったからだ。大男には気の長い人
間が多いというが、大浦はちがう。すぐかっとなる。社会人になった今は、だいぶお
さまってきたが、それでもかっとなると手がつけられない。周りの人間は「ウラ」と
彼のことを呼んでいる。

その晩、ウラといっしょにいたのは、赤池、通称「イケ」だった。ウラより二十セ
ンチも身長が低いくせに、イケも喧嘩早い。名前の通り、すぐまっ赤になる。ウラと
イケはコンビだが、「史上最悪のコンビ」「最も狂暴なコンビ」と周囲にはいわれてい
る。「おかしな二人」といわれることはない。

二人は今、「デイ・バイ・デイ」というコンビニエンスストアにいた。青いストラ
イプの入った上っ張りを着ている。ウラに合う上っ張りは「デイ・バイ・デイ」の管
理本部が急速アメリカからとりよせたものだ。「デイ・バイ・デイ」は、「セブニーイ
レブン」と同じでアメリカからやってきた、コンビニエンスストアのチェーンだった。
後発なので、都内でもまだ数は少なく、立地条件も恵まれていない。

二人がいる店は、昔は工場地帯だったのが、地下鉄の整備で急激にアパートやマン
ションの増えた埋立て地域にあった。持主が夜逃げした工場やぼろぼろの倉庫が、ま
新しいマンションなどと背中合わせに建っている。昔から東京に住む人々には、「ガ
ラの悪い」地区だと思われていた。事実、暴走族も都内には珍しく残っていたし、
ひったくりや痴漢も多い。それに何より、二人のいる「デイ・バイ・デイ」が、半年
間に五回も強盗に入られていることが証明していた。しかもそのうちの四回は同じ犯
人（らしい）なのだ。

「お前、でてくるなよ」

カウンターの中间にいたイケがウラにいった。十時を過ぎると、店の周囲はまっ暗に
なる。「デイ・バイ・デイ」の中だけが煌々と明るい。右隣には広い駐車場があり、

左隣は倉庫だ。地下鉄の駅から少し離れていて、向かいには業績が悪化して閉鎖された工場があった。元は弁当屋だった店のオーナーは、その工具寮が近くに建ちそうだとこの噂をあてこんだのだ。

「裏は暑っ苦しいんだよ。それに段ボールがやたら積んであって狭いし——」

「お前がいると客がこねえんだ。さっさとこんな仕事終わらせようぜ」

「くそっ」

ウラは唸った。

「土曜日だつうのについてねえよ」

「その辺にあるエロ雑誌でももってって、センスリこいてろよ」

イケが入ってすぐ左手にある本棚を指さしたとき、ガラスの自動扉が開いた。ジャージの上下を着た、色の白い少年が入ってくる。夏なのに、冬物のような厚い生地のジャージだった。スイング式の奥の開閉ドアの前に立つウラに気づくと、驚いたように目を丸くした。

「いらっしやいませ」

イケがいい、ウラも、

「いらっしやいませ」

と太い声をあげた。少年は首をすくめた。今にも外へ逃げだしそうだった。イケはウラに首をふつて見せた。ウラはしぶしぶ、スイングドアの奥に消えた。

少年はまだおどおどしていた。イケの方を見やり、目が合うと下を向いた。やがておどおどと、奥の大型冷蔵庫に歩みよった。店内は冷房がきいていたが、その晩は特にむし暑かった。少年がガラス扉を開くと、冷蔵庫のモーターは一段と唸りをあげ、扉はまっ白に曇った。

少年はガラス製の小壘に入った清涼飲料水を四本選び、もう一本をとろうとして床に落とした。壘は割れなかったが、あわてた少年が片手をのばしたため、さらに二本が床に落ちた。

「カゴ、使いますか」

イケは声をかけた。少年は無言で首をふった。ようやく五本を胸に抱くと、カウンターまでやってきた。カウンターに壘をおき、イケがレジスターのバーコード読みとり器を手しているあいだに、今度は弁当の並んだ冷蔵庫の前に歩みよった。

たっぷり五分は悩んだ。

結局、チキンカツ弁当を手にはカウンターに戻ってきた。

「弁当あっためます？」

少年はまた首をふった。イケは弁当のバーコードを読みとった。

「一〇七六円です」

少年が不意に目をみひらいた。くるりと踵かかとを返し、大型冷蔵庫に走っていく。緑茶の缶をとりだした。

「一一八六円です」

イケは怒鳴りつけたいのをこらえていった。こういう愚図がいちばん頭にくる。少年はジャージのヒップポケットから黒革の小銭入れをだし、折り畳んだ千円札を一枚だし、コインを捜した。結局コインは見つからず、もう一枚の千円札がでてくるまで、イケは爪先つまさきで小刻みに床を蹴けっていた。

またチキコンが鳴っている。理由はわかっていた。トルエンが切れたからだ。ビニール袋の中のティッシュはすっかり乾いて、もう全然匂におわない。昼前からやっていたので、いつもだったら、もう充分なのに、今日はちがう。チキコンの日だからだ。

チキコン、チキコン、チキコンコン。

チキコン、チキコン、チキコンコン。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。